企画特集4【語り継ぐ戦争】朝日新聞北海道版　2013年8月18日

(4)戦車に突入　自爆訓練

■軍国少年　二度と出さぬ

道退教石狩・札幌支部　阿部　幸一

【林美子】札幌市白石区の住宅街に、「白石郷土資料室」の看板がかかった平屋の建物がある。元小学校教師の阿部星道(せいどう)さん(83)が、収集した白石の歴史資料を展示するために自宅の敷地に建てたものだ。資料室や自宅は、約2千点もの資料であふれかえっている。聞きつけた人々が古い物を託しにやって来る。中には出征兵士に贈られた日章旗の寄せ書きや、陸軍の軍帽などもある。今年に入り、近所の人から千人針が寄贈された。女性が布に一人一つずつ赤い糸で玉を結び、虎の形と「祈武運長久」の文字を描いたものだ。弾よけになると信じられていた。「兵隊が直接腹に巻くもの。こんなに生々しい物はない」としみじみと語る。

阿部さんは戦前、軍国少年だった。1943年、海軍飛行予科練習生(予科練)に合格したが、目の検査で入隊できず。翌年、14歳で東京の陸軍少年飛行兵学校に入る。

戦闘機に乗って特攻攻撃をするはずが、沖縄戦で米軍陣地に突入する陸上訓練をさせられた。銃を両手で捧げて匍匐(ほふく)前進し、鉄条網を破る。鉄かぶとに傷がついたら「天皇陛下下賜(かし)の品に傷をつけた」と三食抜きの懲罰を受け、革靴で徹底的に殴られた。

米軍の本土上陸に備え、弾薬を抱えて戦車に突入する訓練もした。「現代なら自爆テロ。天皇のために命を捨てると信じこんでいたんです」

空襲も受けた。兵学校の防空壕(ごう)は将校用で、生徒は地面に掘ったたこつぼに入る。機銃掃射が自分のたこつぼをかすめたことが2度あった。「穴の反対側に身を寄せていたら、死んでいた」。ある時、空中戦のさなかに2人の米兵がパラシュートで降りてきた。中隊長の命令で、地上に落ちたパラシュートに向かって銃剣を手に突撃した。初めて見た米兵は、自分より少し年上くらいの少年。後に銃殺されたと聞いても、米兵が憎かったので当たり前だとしか思わなかった。

敗戦で、自分がどういう教育を受けてきたかに初めて気がついた。中国戦線からの帰還兵が「中国人の首を切った」と得意げに話すのを聞いて育った。太平洋戦争が始まると、小学校で教師が日本軍が占領した南方の島々の地図に日の丸の小旗を立て、みんなで万歳をして喜んだ。「大和民族はすぐれている」と教えられ、同級生の朝鮮人やアイヌ人をばかにしていた。

教師になり、平和教育に力を注いだ。受け持ちの児童に、激戦地だった沖縄県糸満市の子どもたちと文通をさせたこともある。

「二度とぼくのような人間が出ないように。人に教えられるのではなく、自分の頭で考える人間に育つように」阿部さんは、2004年に70歳で亡くなった妻茂子さんをテーマに「茂子」という詩集を出版している。茂子さんは満州育ちだった。山の上の住宅に住み、中国人に水を運ばせ、纏足(てんそく)の女性がよろよろしながら運ぶのを指さして笑ったと阿部さんに語った。

「中国で日本人は子どもでもいばっていた。あの集落に行って謝りたい」が口癖だった。長年の闘病のため、願いはかなわなかった。中国に連れて行ってやりたかったと、